

『だからタヌキはまた嘘をつく』 作：岩本憲嗣

■あらすじ

『タヌキのヘソ饅頭』がヒットした、遅咲きの絵本作家・本田勝男は河口湖町の書店に訪れていた。

何度も経験している筈の読み聞かせイベント。けれど今回は終始落ち着かない様子。

それと言うのも、かつての恋人が別の男と結ばれこの街に居るのをSNSで知ってしまったからであった。

イベント後のサイン会で一人きりでやってきた少年に尋ねられる。

『なんでタヌキはいつも悪者なの？』

それに対して上手く返答出来なかった本田。

翌日、書店員の計らいでカチカチ山へ観光に行く。

そんな最中、本田はSNSで見かけたかつての恋人の撮った写真と同じ景色をみつける。

そこは遊覧船乗り場のすぐ近く。

一人佇む本田に声をかけてきたのは、前日の少年であった。

遊覧船に乗り語り合う本田と少年。本田は前日の質問の答えを少年に語る。

そして本田自身も少年との会話の中で自身の想いへの答えをみつける。

その後に本田は偶然かつての恋人との再会を果たす。

そして本田は彼女に嘘をつく。

それこそが本田の見つけた答えだったのだ。

■登場人物

本田勝男（ほんだかつお・男性・34歳・絵本作家）

四月一日まさる（わたぬきまさる・男性・8歳・小学生）

新井達夫（あらいたつお・男子・25歳・編集者）

沖津寧々（おきつねね・女性・24歳・書店員）

四月一日仁美（わたぬきひとみ・女性・30歳・まさるの母）

四月一日麻子（わたぬきあさこ・女性・55歳・まさるの祖母）

子供1〜4

観光客

○書店内・イベントスペース

店内に設けられたイベントスペースで絵本の読み聞かせを行う本田。沢山の親子連れが聴き入っている。

本田『まいったまいった。もう悪さはしねえから許してくれよ。タヌキは村人たちに泣いて謝りました』（絵を指して）ほら見て、ごめんなさいしてるね。村の人は許してあげたらいいと思う？』

子供1「許す！だってタヌキ泣いてるよ」

子供2「違うよ、嘘泣きだもん。ほら、タヌキ悪い目してるー！」

子供3「きつとまた化かすんだよ！」

本田「さてどうかな……じゃん！『なんとタヌキ、みんなが話し合う隙に逃げ出そうとしたのです。こら待てタヌキ！村人の一人がタヌキを捕まえようとして……ギョつとおへソを掴みます。逃げようとするタヌキ。絶対離さない村人。すると……ブチッ！……』」

本田『イテテテ。そう叫ぶとタヌキは山へ逃げて行きました。しかしたまげたへソがちぎれたぞ。だけどこのおへソ……丸くてふくらしててお饅頭みたいだな……それだ！』さてさて、村人はこのおへソをどうしたかと言うと？』

子供4「食べちゃった！」

子供2「キタナイよ！」

本田「食べちゃった惜しい。実はね……じゃん！『タヌキのへソそっくりの饅頭をいっぱい作って売ることにしたのです。村中に溢れるへソ、へソ、へソ、取り返してやろうと仕返しに来たタヌキはどれが自分のへソか分かりません。それどころか道行く旅人が手にしたへソをガブリ、あちらでガブリ、こちらでガブリ、まるで自分のへソが齧られるようで堪りません。ひえええ！こんな村もういられないと山へ帰って行きました。それ以来、へソ饅頭はタヌキに化かされないお守りとして人気となり、村は豊かになりましたとさ』おしまい」

拍手する親子達。本田、嬉しそうにそれを見ながら視線は違う何かを探している様子。

本田M「……何やってるんだ。そんな運命的に出逢うハズなんてないじゃないか」

沖津がやってくる。

沖津「本田先生、どうかされました？」

本田「え？いや別に」

沖津「はい、じゃあこれからお話をして貰った作者の本田勝男先生のサイン会を始めます。みんなはお父さんお母さんと一緒にここに並んでねー！」

絵本を持つ子供たちに話しかけながらサインをする本田。その都度母親の顔を確認するようにチラリと見やる。

本田M「彼女は今はこの街にいる。ただそれだけなのに。僕は何を期待して……」

子供1「面白かったです！」

本田「え？有難う。どの辺が面白かった？」

子供3「おへソがとれるところが好きー！」

子供1「タヌキがイテテってのが好き！」

本田「本当？嬉しいな」

賑わうサイン会。その場を仕切る沖津の元に新井がやってくる。

新井「結構人来るんだな？」

沖津「ウチは毎月やってるんで常連さんも多いんですよ。でも今日はいつもの倍以上です。流石は『タヌキのヘソ鰻頭』ですよ」

新井「だろだろ？持つべきものは出版社勤務の大先輩ってさ」

沖津「本当、先輩昔から運だけはいいいですね。あ、全員終わったかな？」

新井「は？可愛くねえな」

本田「あ、待って。君、サインまだだよね」

一人で居るまさる。手にした絵本を無言で突き出す。

本田「お話どうだった？」

まさる「面白い……けどなんで？……なんでタヌキはいつも悪者なの？」

本田「え？」

まさる「何でタヌキを悪者にするの？」

本田「それは……ははは、何でだろうね？」

まさる「サイン……僕の名前も書いて」

本田「勿論。えと……何君かな？」

まさる「……たぬき」

本田「え？たぬき！？」

まさる「わ・た・ぬ・き……これ！！」

鞆に入った名前の刺繍を指さす。そこには【四月一日まさる】とある。

本田「四月……ああこれで四月一日君。はい、今日はありが……」

本田がサインを終えるとまさるは本を鞆にしまい走り去る。

本田「え？あ、ちよっと……」

沖津「あ、またあの子か」

本田「また？」

沖津「よく一人でウチに来てくれてるんです。絵本が大好きなんでしょうね。ただ、いつもあんな調子で……」

新井「ささ、イベントも終わったワケだし打ち上げにでも繰り出しましょうか」

沖津「私まだ仕事があるんで」

新井「誰もおめえに言ってるえよ」

本田は一人スマホをいじっている。スマホにはSNSの画面。湖畔に浮かぶ遊覧船の写真が映っている。

新井「って、またスマホですか？子供達相手にした直後にエロサイトですか？」

本田「まさか、ちよっとSNSを」

新井「こっち来てからしよっちゅう見てませんか？ほーら、サツサと呑みいきますよ」

本田「え？……あ、ああ」

○河口湖畔のお土産屋・店先（夕）

海外の観光客に接客する麻子。

麻子「あー、ホートーイズ、ジャパニーズメン！ああ……ヌードルメン？」

観光客「nude men?what?」

そこに仁美がやってくると流暢な英語で対応。観光客を2階の食堂へ促す。

麻子「助かったよ仁美さん。流石は帰国子女？本当、ウチの息子なんかには勿体ないね」

仁美「そんなことないです。そうだ、今の方々2階の食堂でおほうとうを……」

麻子「分かったよ。じゃあ店番は頼んだね」

2階へ上がる麻子。

まさるが帰宅する。仁美にバレないようにそっとレジ近くからマジックを持ち出すと店先に並ぶ饅頭に×の字を書き足していく。まるで『タヌキのヘソ饅頭』のそののよう。

まさる「出来た」

仁美。まさるの悪戯に気づく。

仁美「まさる君！？何やってるの！？」

まさる「こうすると沢山売れるんだよ」

まさるは尚も×印を描き続ける。

仁美、まさるの手をとってそれを

やめさせる。まさるは仁美の手を

振り払おうとする。

まさる「やめろよ……やめろって!!」

仁美「それはお母さんの台詞でしょ。どうして店の商品にこんな悪戯……」

まさる「悪戯じゃないって！」

まさる、仁美の手を振り払う。仁美咄嗟にまさるの鞆を掴むがまさるは鞆を棄てて逃げる。反動で尻餅をつく仁美。鞆の中身が散らばる。

仁美「痛ったあ……いけない」

散らばった中身を片付ける仁美。絵本を手にする。

仁美『タヌキのヘソ饅頭』？絵本……か」

絵本をバラバラと読み始める仁美。

仁美「そうか、これの真似して……あら？サインがある。本田勝……え？」

○居酒屋・店内（夜）

テーブル席で呑む本田、新井、沖津。

新井「まったく、おめえは呼んでねえだろ」

沖津「お仕事をお願いしたのはウチですから。せめてご馳走させて頂かないと」

新井「マジか？よしジャンジャン呑むぞ」

沖津「先輩は奢りませんよ。依頼したのは本田先生にですから」

新井「そりゃ誰の伝手だ？俺だろ？」

本田「ははは仲いいですね。確か二人は……」

沖津「大学の文芸部の後輩なんです。あ、あと仲は悪いですから。先輩が一方的に私を好きただけです」

新井「出鱈目言うな馬鹿！」

沖津「だって先に友達申請して来たの先輩じゃないですか」

本田「友達申請？SNS 何かの話？」

新井「そうなんですよ。最近の SNS ってお節介ですよ、頼んでもいないのに『あなたの友達じゃないですか？』なんて勝手に表示して来やがって」

本田「ああ……確かに。あれってどういう仕組みなんだろうね」

沖津「メールアドレスを勝手に検索してくれるんですよ。つまり卒業して縁が切れてせいせいしてたのに、先輩が後生大事に私のメアドを登録してたから表示されたんです」

新井「馬鹿！普通イチイチ消さねえだろ」

本田 M「だから今頃になって彼女の……」

沖津「ま、でもそのお陰で本田先生とご縁が繋がったのは凄くよかったです。改めてましてこの度は有難うございました。先生の作品は出版された去年からずっと人気作の上位で……」

本田「そんな、先生とかやめて下さい」

新井「そうそう、うだつの上がない只のオッサンですものね」

沖津「先輩!？」

本田「いやいや、新井君の言う通りでね。絵本作家とは名ばかりで、最近まで本業はコンビニバイトでしたし。ははは」

新井「そうそう。それで婚約者にも逃げられたんですって？はははは」

本田「ん？まあ……そんなこともあったかな」

沖津「え？あ、でもその『タヌキのヘソ鰻頭』は物凄く人気で……」

本田「そう。タヌキのお陰でやっとかさ作家らしくなったというか」

新井「はい！そんなタヌキを売れると見抜いたのが何を隠そうこの俺です！」

沖津「たまたま持ち込んだ時の担当が先輩だっただけですよね」

新井「違えよ！直感でビビッと来たぜ。こりゃイケる。時代はタヌキだったさ」

本田「タヌキ……タヌキねえ」

沖津「そうだ、お帰りは明日の夜って仰ってましたよね。なら明日は観光でもしませんか？案内します。タヌキ案内！」

本田「タヌキ案内？」

沖津「ご存知ですか？河口湖にはカチカチ山ロープウエーがあるんです。同じタヌキを描く作家として是非一度!!」

本田「カチカチ山……ですか」

○カチカチ山・山頂

山頂から景色を眺める本田と沖津。

沖津「どうですか？カチカチ山」

本田「へえ、凄いなあ。河口湖が一望出来るんですね。あれ？あの船って……」

沖津「遊覧船ですね。ロープウエー乗り場のすぐ近くから出てるんですよ」

団子を頬張りながら新井がくる。

新井「本田さんこれ美味いですよ。たぬき団子ですって。アレじゃないですか、タヌキのへ

ソ饅頭のパクリですよきつと」

本田「こっちが先に決まってるでしょ」

沖津「先生！ここで写真撮りましょう！」

手招きする沖津。そこにはウサギに懲らしめらるタヌキのオブジェ。

新井「はははは、見事にボコられていますね」

沖津「あれ？どうしました先生？」

本田「いや、ちよつと……」

沖津「行きますよ。はいチーズ」

沖津がスマホで写真を撮る。

沖津「感動です。へソ饅頭の作家がカチカチ山のタヌキとツーショットですよ」

本田「……沖津さんは絵本詳しいんですね」

沖津「え？まあ児童書の担当続けて結構経つんで。でもきつと先生程では……」

本田「どう思います？何でタヌキはいつも昔話で悪者なんですかね」

沖津「え？ええと……どうしてですかね」

新井「んなの化かすからでしょ」

沖津「それならキツネも化かしますよ」

新井「馬鹿か。キツネはお稲荷様ってな具

合に神様として祀られてんだぞ？タヌキが祀られてるか？おポンポコ様なんて締まらない
ったらねえだろ？」

沖津「そうか……でも」

新井「それより本田さん腹減りませんか？山下りてほうとう食いにいきましょう」

新井が一人駆けていく。

沖津「はあ。今食べてたばっかなのに」

○ロープウエー・中

ロープウエーで山を下る一行。二人が外の景色を見る中、本田は一人スマホでSNSを見

る。SNSには湖畔に浮かぶ遊覧船や船内から眺めた景色の写真らが載っている。

○ロープウェー乗り場・出口

階段を下りていく一行。壁面にはカチカチ山のお話がイラストと共に描かれている。それを熱心に眺める新井。

新井「あれ？このカチカチ山俺の知ってるのと違いますよ」

本田「え？違うって何が？」

新井「タヌキの奴お婆さんをババア汁にしてお爺さんに食わすとか、最後ウサギに殺されるとか、結構エグいなあ」

本田「カチカチ山ってそんなでしょ？」

沖津「最近のはマイルドなんですよ。お婆さんは死なないし、タヌキは最後は改心して山の幸を届けたりするんです」

新井「そう、タヌキの恩返し的な」

本田「へえ……そうなんだ」

沖津「あ、先生。あれがさっき言った遊覧船乗り場ですよ」

本田「え！？どれですか？」

沖津「ほらあそこですよ」

本田、スマホを取りSNSを開く。

新井「またですか？飯食ってからに……」

本田「悪い。ちよっとトイレ行って来るから先に店入ってくれないかな」

沖津「別にトイレくらい待ちますよ」

本田「いや、その……結構大事だから。ははは。ほら、後でまた連絡するからさ」

本田が慌ててその場から走り去る。

沖津「え？ちよっと!？」

○遊覧船乗り場

本田が駆けてくる。辺りを見回すとSNSを開き画面隅に出てくる【友達ではないですか欄】にある【HITOMI】という名前を選択。英語で綴られた日記と共に常々本田が観ていた遊覧船の写真が出てくる。

本田M「……ここなんだ。ってことは近くに？」

辺りをキョロキョロする本田。再びスマホを見やり大きいため息。その場にしゃがみ込み湖を眺める。

本田M「……そうだよ。何考えてるんだ僕は。実際いたらいたでどうするつもりだ？何て話しかける？そもそもどんな顔して……」

まさる「タヌキの人？」

本田「わっ!?!」

本田が振り返るとまさるがスケッチブックとを持って立っている。

本田「君は昨日の……」

まさる「何してるの?」

本田「いやその……景色を見てた?」

まさる「一人で?」

本田「まあ……今は一人で」

暫く二人の間に微妙な間が生じる。

まさる「ねえ、オジさんもひよつとしてタヌキだったりする?」

本田「はい?」

まさる「僕、クラスでタヌキってあだ名なんだ。名前がワタヌキだから」

本田「ああ……あ、だからあんな質問……」

まさる「うん。でもさ。僕気づいたんだけど、ひよつとしたらオジサンもじゃないの?」

本田「は?」

まさる「もう小2だから漢字くらい読めるもん。オジサンは本田ってんでしょ。本はニッポンのポン。それに田んぼのタ。じゃあポインタでしょ。タヌキみたいな名前じゃん」

本田「僕が……ポインタ?」

まさる「……やっぱりそうなの?」

本田「……そうか。成る程ね。(SNSを眺めながら)ねえ、君さ……あれ乗ったことある?」

○遊覧船・中

河口湖を颯爽と進む遊覧船。心地よい風が本田とまさるに吹く。

本田「へえ、結構速いんだなこれ」

まさる「慣れちゃったからよく分かんない」

本田「そんなに良く乗ってるの?」

まさる「月に一度くらい。僕が喜ぶと思ってお母さんになった人が乗せてくれる」

本田「なった人?」

まさる「お父さん入院してるし遠くには行けないからいつもこれ。なんかもう飽きちゃったかも」

まさる、スケッチブックを開くと何やら描き始める。

本田「(少し様子を見て)何やってるの?」

まさる「絵本のこーそー。ああ、オジサンが話しかけるから失敗しちゃった」

まさるがスケッチブックを破る。突風が吹きそれが飛ばされる。

まさる「わっ!?!」

すかさずそれをキャッチする本田。中を開くと稚拙な絵で描かれたスーパーマンのような姿のタヌキ。

まさる「勝手に見ないで！」

本田「これ……タヌキ？は……ははははは」

まさる「何で笑うんだよ！！タヌキが主役じゃおかしいかよ！！」

本田「悪い悪い。いや、面白いな。何これ、ヘソばくだんって」

まさる「……オジサンの本をサンコーにしたんだよ。お饅頭より爆弾の方が強いし」

本田「そうか……そりゃ光栄だな。へえ、このタヌキはヒーローなわけ？」

まさる「そうだよ。悪者をやっつけるんだ」

本田「ヒーローか……オジさんあれから考えたんだ。何でタヌキは悪者なのか」

まさる「何で？」

本田「担当さんはタヌキは化かすからだって言ってた。うん。確かに人を騙したり嘘をついたりするのはよくないことだ」

まさる「そんなの分かってるよ。でも何でタヌキが嘘つきだって決めつけるの？」

本田「ううん。残念だけど。オジさんもタヌキはやっぱり嘘つきだと思う」

まさる「何でだよ！」

本田「何でって……君が言ったんだろ。オジさんもタヌキだからさ」

まさる「タヌキなの？」

本田「そう。だから分かるんだ。タヌキは嘘をついて化かさずにはいられない。いつだって嘘をつき続けている」

まさる「おかしいよ！コンキョは？」

本田「昔むかし……と言っても4年くらい前かな。東京にポンタというぐーたらタヌキが住んでいました」

まさる「それ……オジサンのこと？」

○イラスト

本田似のタヌキと女性が出逢う絵。

本田「ある日ポンタは人間のお姉さんと恋に落ちました。ポンタはお姉さんと結ばれる為に一生懸命化け学を学んで立派な人間に化けようと努力しました。けれどもいつまでたってもポンタは人間になれません」

まさる「なんでなれないの？」

本田「そうだね。多分ポンタには化け学の才能がなかったんだ」

まさる「じゃあどうなっちゃうの？」

○イラスト

タヌキと女性が暮している絵。

本田「お姉さんはそれでも待ち続けました。いつかポンタが立派な人間になれる日を夢見て。そうして気が付けばお姉さんは沢山の時間と沢山のお金を使っていたのです」

まさる「ポンタはどうなったの？」

本田「どうにもなりません。相変わらずのぐーたらタヌキです。どうして人間に化けられないのか。ポンタは悩んで悩んで一つの答えを見つけます。そう、お姉さんです」

○イラスト

タヌキがカンカンになって女性に怒鳴っている絵

本田「ある日ポンタはお姉さんに言いました。僕が人間に化けられないのはお姉さんのせいだ。お姉さんが近くにいる僕を甘やかすせいで。今すぐ出て行け！もう……もう二度と顔を見たくない」と

まさる「意味わかんない！だってポンタはお姉さんのことが好きなんですよ？」

○イラスト

一匹ぼっちの部屋で泣くタヌキの絵。

本田「翌日、家からお姉さんは消えていました。優しいお姉さんはワガママなポンタの願いを文句一つ言わず聞き入れたのです。一匹になってしまった部屋でポンタは涙しました。もう二度と会えないお姉さんのことを思って。そうだってポンタは……」

○遊覧船・中

景色を眺めながら語る本田と、そんな本田をじっとみつめるまさる。

まさる「嘘ついたの？お姉さんのこと好きなのに出て行って言ったの？」

本田「よく分かったね。さすがタヌキ仲間」

まさる「何でそんな嘘つくんだよ！だってポンタ……」

本田「ここでクイズです。（まさるの持つ色鉛筆を指さして）嘘は一体何色をしているでしょうか」

まさる「は？嘘の色？」

本田「そう。この色鉛筆で言うどどれ？」

まさる「（赤鉛筆を取り）赤に決まってるじゃん。真っ赤な嘘って言うんでしょ」

本田「正解。でも答えはもう一つある……そう、ポンタがお姉さんに教えて貰った嘘の色……」

…（白鉛筆を取り）白。英語だとホワイトライ。白い嘘って言葉があるんだって」

まさる「ホワイトライ？」

本田「誰かを幸せにする為につく嘘のこと。タヌキは嘘が得意です。一匹になったポンタは嘘に磨きをかけました。そしていつしか嘘で飯が食べられるようになりました」

まさる「オジサン？」

本田「だってポンタは絵本作家になれたんだもの。ヘソがとれるタヌキも饅頭に怯えるタヌキも本当はいない。全部嘘。だけどこの嘘は何色だと思おう？」

まさる「……白？」

本田「そう、白い嘘。多分ね、君もかなり嘘が上手なタヌキだと思うよ」
まさる「僕が？」

本田「だって苗字が4月1日だろ？一年で一度嘘つき放題の日じゃないか」
まさる「……そうか。僕もオジサンみたいな白い嘘つける？」

本田「そりゃ天性の嘘つきタヌキだもの」
まさる「うん」

本田「悪者で何が悪い。嘘つきで何が悪い。いいんだよ。それがタヌキだもの」
まさる「……そうか」

強い風が二人に吹く。まさるは再びスケッチブックにお話を書きはじめる。

○遊覧船乗り場

下船する二人。

本田「どう、進んだ？」

まさる「うん。コーソー進んだ」

本田「そうか」

まさる「楽しかった。じゃあね!!」

まさるが走り去ろうとするのを呼び止める本田。

本田「待って!!……!!……!!一つ質問してもいいかな。さっきのお話の続き」

まさる「え？」

本田「やがてポインタは人間にも化けられるそこそ有名なタヌキになりました。一方お姉さんは別の人間と結ばれました。けれどその人間は病気に罹ってしまい、なかなか生活も厳しいようです。ああ、あの時タヌキに使ったお金があればこんなことにはならなかったのに」
まさる「うん」

本田「さて、あんなことを言ったポインタは今更お姉さんに会いに行ってもいいでしょうか。どんな顔して会えばいいでしょうか。何をしたらいいでしょうか」

まさる「うん……会えばいいと思う。
だって嘘が得意なんですよ。だったらまたお姉さんを幸せにする白い嘘をついたらいいじゃない。ポインタなら余裕で出来るよ」

本田「……そうか。そうだな」

まさるが走り去る。本田がスマホを取り出すとそこには新井からの沢山の電話とメールの着信履歴。

○お土産屋・2階食堂

麻子が新井、沖津を見送る。

新井「最高に美味しかったです！」

麻子「ありがとうございます」

沖津「にしても、先生どうしたんですかね」

○同・1階店先

新井と沖津が下りてくるとそこには本田が待っている。

新井「本田さん！？ったく。一体どこ行ってたんですか？電話にも全然出ないし」

本田「悪い。ちよっと色々」

沖津「スママセン先生。実は先に食事……」

新井「仕方ないな、今から食べます？」

本田「気にしないで、僕は饅頭でも買って腹の足しにするよ」

沖津「じゃあここで買っちゃいます？」

途端に辺りを物色する新井。

新井「あ、これ美味そう。こっちもいいな」

沖津「もう、自分の選んでないで先生の……」

新井「ああっ！！ちよ！ちよっ！！本田さんこっちきて下さいよ！！」

手招きする新井。二人が駆け寄るとそこには刻み海苔で×字が記された饅頭。

沖津「タヌキのヘソ饅頭！？」

新井「ちよっと、これウチに無断でやっていますよね。俺ガツンと言ってやります」

本田「やめなつて。別にこれくらい……」

そこにまさるがやってくる。

まさる「あ！オジサン！？」

新井「あれ？あなたいつもの……」

本田「どうしてここに？」

まさる「だってここ僕ん家だし」

仁美が小走りにやってくる。

仁美「すみません。いらっしやいませ、ほらまさる君もういいから……え……」

本田「あ……」

本田と仁美。視線が合ったまま動きが止まってしまふ。

仁美「そ……その……」

本田「……あ、あの！……この饅頭一つ貰ってもいいですか」

仁美「は、はい」

饅頭を紙袋に包みだす仁美。

新井「あ、それからこれひよっとしてタヌキのヘソ饅頭を真似てません？」

仁美「え？……は、はい」

新井「やっぱり。この本田さん、タヌキのヘソ饅頭の作者なんですけど。こういうの勝手にやって貰ったら……」

仁美「その、スママセン。その……」

本田「新井さん何言ってるの。冗談じゃない。こんなのが僕のへソ饅頭なワケないでしょ」
新井「はい？」

本田「……全然駄目だこんなの。見た目も（紙袋を受け取り饅頭を頬張り）味もイマイチだ。こんなのがタヌキのへソ饅頭だなんてありえない。おこがましい」

新井「いや、でもどう見たって……」

本田「全然違う。だからその……もつと沢山作って、沢山売って、クオリティを上げて下さい。ちゃんと出来てるかどうかまた僕がチェックしに……来られるほど僕は暇じゃないんです。その……新井さん、このへソ饅頭もどき、宣伝して貰えないですか？」

新井「はい？」

本田「へソ饅頭のファンの人達にこれを食べて貰って判断します。そうしましょう」

新井「いや、勝手に決めないで……」

本田「頼みます」

新井「……はあ、面倒臭いなあ」

仁美「勝男さん……」

本田「頬張りながら）ああ、全然ダメだこれ」

本田の目に涙があふれる。

まさる「オジサン……泣いてるの？」

本田「違う。喉に詰まっただけ……」

まさる「ううん。タヌキには分かるんだよ。同じタヌキの嘘なんてさ」

まさるが本田に微笑みかける。本田、涙目になりながらまさるに微笑み返す。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba127@hotmail.com) までメールで報告頂きますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumbal1227@hotmail.com (岩本)